

山崎郷土叢

No. 63
 59. 4. 25
 兵庫県赤粟郡
 山崎町教育委員会内
 山崎郷土研究会
 電話②2000

近世初頭の山崎藩 (二十一)

島田 清

二、池田家時代 (統二十)

○ 池田家の家中騒動 (7)

4. 騒動勃発の素地 (V)

1 新封予定の駿府城と甲府1

慶長十四年 (一六〇九) 十二月、家康の第十子長福丸が駿府城に入った。長福丸は慶長七年に生まれ、二歳になった慶長八年十一月七日、新知二十萬石をもって水戸城に入ったが、翌九年、五萬石を加えられて二十五萬石となった。

慶長十一年、家康は上洛し、八月十一日、参内した。このとき、長福丸は兄の五郎太丸とともに従い、二人そろって従四位

目次

近世初頭の山崎藩 (二十一)	島田 清	一
長水城の盛衰 (上)	岩井忠彦	八
宍粟鉄で鍛えられた山崎八幡神社の奉納刀について	前田 昇	十一
山崎町内の地名 (三)	入江静夫	十三
秋の研修旅行記	志水美好	十六
事務局だより	十七

下に叙せられ、さらに、五郎太丸は右兵衛督に任ぜられて義利朝臣と名乗り (のち義直)、長福丸は右近衛権少将に任ぜられて常陸介頼将朝臣と名乗った (のち頼宣)。

慶長十四年 (一六〇九)、常陸介頼宣は二十五萬石を加えられ、駿河・遠江・三河三国五十萬石の城主として駿府へ入城した。ただし、このときの駿府城は、家康の隠居所で、家康は健在であった。したがって、頼宣が城主になったといっても、独立した藩主のような行政を行ったのではなかった。

慶長十九年 (一六一四)、頼宣は十三歳になった。このとき、大阪冬の陣が起こった。頼宣は、父家康に向かって出陣したい、と申し出た。しかし、家康は「まだ若年だから」といって許さ

なかった。頼宣は、「十三歳が二度あるか」と鋭く家康に詰め寄ったという。戦国武将の心意気を示す佳話として、このことは後世ながく語り伝えられた。

元和元年（一六一五）、大阪夏の陣によって豊臣氏は滅亡し、次の元和二年四月十七日、家康は七十五歳で薨じた。駿府城は、これより名実ともに頼宣の支配下となり、駿府の歴史は新しい時代に入った。

元和五年（一六一九）、安芸広島城四十九萬石の領主、福島正則が改易された。理由は、法度に背いて広島城を普請した、というのであるが、徳川幕府の豊臣恩顧諸大名取潰し政策の犠牲になったのだともいわれる。

慶長五年（一六〇〇）、三十七萬六千石の封を得て紀伊和歌山城主となった甲府城の浅野幸長は同十八年三十八歳で歿し、あとを継いだ長晟^{あき}は元和五年、福島正則改易のあとを受けて広島城に入り、四十二萬六千石を領した。駿府城の頼宣が五萬石の加増を受け、五十五萬石の太守となって和歌山城に入ったのはそのあとである。このときの頼宣は従三位中納言で紀伊中納言と呼ばれた。しかし、その後、権大納言となり、尾張義直と並ぶ紀伊大納言家を起こした。

頼宣が去ったあとの駿府城は幕府の直轄地となり、松平重勝が城代となった。この城代は、大阪城代と並ぶ幕府の重職で、一時、忠長の在城で崩れるけれども、その失脚後は復活し、幕末まで続いた。番城の制が確立すると、城代を助けて城外を守

る駿府加番、また、駿府城において城を守る駿府定番なども設けられた。

甲府において二十三萬石余を領していた秀忠の第二子忠長は、寛永二年（一六二五）、駿河・遠江を加えられ、甲・駿・遠三カ国五十萬石の太守となって駿府城へ入った。池田輝澄が、忠長失脚後の寛

永九年、駿府城主に擬せられ、甲斐の幕府領をも預けられるという内証を得たのは、幕府が、駿府城の取扱を忠長の場合と同じように考えていた証拠であるが、それでは、甲州の歴史はどのように展開してきたが、ここで、ふりかえってみることにしよう。

甲斐の歴史は、天正十年（一五八二）三月、武田勝頼が天目山に自刃してから大きくかわった。すなわち、織田信長が部将河尻秀隆を領主に据え、信長流の政治を行ったからである。しかし、三カ月後に起こった本能寺の変で信長が死ぬと、秀隆も武田家の旧臣に殺された。北条氏政と徳川家康は、このあと、



領有をめぐって争ったが、結局、徳川家康の領国となり、家康は平岩親吉を甲府城代に、成瀬正一・日下部定好を奉行に据えて国政を行わせた。

天正十八年（一五九〇）七月、豊臣秀吉は小田原を征伐して北条氏を滅ぼした。そして、家康の領国駿・遠・参・甲・信をおさめて関東に移した。甲斐は、このとき、秀吉の養子秀勝に与えられた。秀勝は、秀吉の姉が三吉吉房に嫁して生んだ子で、のちに関白となった秀次の弟である。秀勝は、十一月に甲府へ入った。しかし、半年も在城せず、天正十九年三月、岐阜へ移り、あとを加藤光泰が継いだ。光泰は、受封の翌文禄元年（一

最新型カラー現像機導入 カラープリント・スピード仕上げ



五九二）、朝鮮の役が起こって出陣した。そして、二年八月、釜山で病死し、あとに浅野長政・幸長が封ぜられた。交替の目まぐるしさは目をおおうばかりとあってよい。しかし、秀吉が、養子の秀勝や、加藤光泰・浅野長政といった信頼する部下を甲州に封じたのは、関東の徳川氏牽制の場所

として、甲斐を重視したためである。

慶長五年（一六〇〇）関ヶ原合戦が起こり、家康は大勝した。浅野父子はこのとき、紀州和歌山に大封を受け、甲府へは再び平岩親吉が入部した。同八年、家康は、四歳の第九子五郎太丸を甲斐に封じ、親吉をその傅とした。

家康の長子岡崎信康（一五五九―七九）は織田信長の女を妻としていた。平岩親吉はこの信康の傅であったが、信康は織田信長の命によって天正七年自刃した。親吉はこれを悲しみ、かつ、責任を痛感して爾後妻帯せず、したがって子もなかった。家康はこれを哀れんで、第八子松千代が文禄四年（一五九五）に生まれると、佐枝伝介らの家臣をつけて親吉に養わせた。しかし、松千代は慶長五年二月、六歳で夭折してしまった。家康の第九子五郎太丸の母は松千代と同じお亀で、松千代のなくなった年の十一月、五郎太丸を生んだ。このため、家康は、五郎太丸が四歳になったとき（慶長八年）、松千代のあとを継がせる形で平岩親吉にあずけ、甲府の城主としたのである（封禄二十五萬石）。

慶長十二年（一六〇七）、家康の第四子で尾張清州の城主であった松平忠吉が歿した。このため、五郎太丸は、そのあとを継いで尾張六十二萬石の大守となり、新しく名古屋城を築いて移った。傅役であった親吉も、もちろんこれに従い、犬山城十二萬三千石の主となった。

五郎太丸の去ったあと、甲斐の国は家康の直轄領となり、武

川・逸見の十二士が交代で守った。十二士というのは、山高・馬場・青木・米倉・入戸野・山寺・折井・曲淵・柳沢・跡部・小尾・知見寺という「武川衆^{むかわ}」で、二人ずつ、十日交代で勤番した。この時代を「武川十二騎時代」という。

元和四年（一六一八）、甲斐の歴史は一変する。すなわち、將軍秀忠の第二子忠長が甲州二十三萬八千石に封ぜられたからである。忠長は、三代將軍家光の弟で、母は、家光と同じ秀忠の正室浅井氏である。織田信長の妹お市の方が近江の浅井長政に嫁して生んだ三女は、長女が秀吉の側室となり、次が京極高次の妻、三女が徳川秀忠に嫁した。この秀忠の室は、名をお江

時計・ぬがね・宝石
津村時計店

中央通り・TEL②0355

諡を崇源院という。文
禄四年（一五九五）九
月、秀忠と婚儀をあげ、
慶長九年（一六〇四）
に家光、同十一年に忠
長を生んだ。忠長は、
幼名国松丸、十一歳に
なった元和四年、甲斐
で新知二十余萬石を与
えられ、同六年、元服
して忠長と称し、従四
位参議に任せられ、左
近衛中将を兼ねた。甲

府宰相と呼ばれたのはこのときである。

同八年、信濃国小諸七萬石を増加され、翌九年、従三位権中納言に叙し、織田信長の女を娶った（これからは甲斐中納言と呼ばれた）。

次で寛永元年（一六二四）八月、駿河および遠江の両国を加え、計五十萬石を与えられ、居城を駿河と定められた。

寛永二年十一月、忠長ははじめて就封のいとまを賜った。

翌三年六月、大御所秀忠は上洛し、続いて八月、將軍家光が上洛した。秀忠は、七月十二日に参内し、太政大臣昇進の詔をいただいたが、辞退して左大臣に任せられ、家光は、八月十二日に参内して従一位右大臣となった。随従していた忠長は、このとき、尾張中納言義直・紀伊中納言頼宣とともに従二位権大納言に昇った。（これより忠長は駿河大納言と呼ばれた）。

新將軍・前將軍が揃って上洛するという、嘗ってみなかった盛儀がほぼ終わった九月十一日、江戸から大御所秀忠夫人の病気が危急である旨を告げてきた。秀忠は、直ちに江戸発向を触れ、淀城を出て二条城へ入った。そして、とりあえず、御気色伺候の使者として稻葉正勝を急行させた。忠長はこのとき、父に乞うて即日出京し、夜を日について馳せ下り、十五日に江戸城に入った。しかし、母の大御台は、その一時前^{ひととき}に薨じていた。忠長は号泣したという。

忠長は、少年時代から父母の愛を一身に集めていた。どちらかという鈍重な家光に対し、利発で明快な忠長の挙措がそう

させたのであるが、これが忠長をわがままにし、兄を兄とも思わぬ振舞に発展させた。諸大名の中にも、忠長こそ次期將軍と見込み、これに近づくものもあらわれた。この形勢をみて、心底から心配したのは家光の乳母春日局である。局は、慶長十六年十月、駿府の家康に謁し、事情をうったえた。家康はこれを聞くと、長幼の序をみだすことは天下の大乱を招くと、直ちに江戸城へ赴き、家光を継嗣と定めた。次期將軍の座は、これで一応の決定をみたわけである。

しかし、元和二年（一六一六）家康が薨じると、情勢が微妙になった。すなわち、元和四年、忠長は十一歳で甲斐の新封二十三萬石を与えられ、同八年、十五歳になると信州小諸七萬石を加えられた。さらに、二十一歳になった寛永元年（一六二四）駿河・遠江を加えて五十萬石の太守となった。のちに「御三家」と呼ばれる尾張・紀伊・水戸の三叔父と比較すると、水戸頼房よりは上に出、尾張・紀伊と並んだのである。少年時代から自己の才能を過信し、周囲からちやほやされてきた青年忠長は、とかく、兄を兄と思わぬふるまいがあったし、家光が將軍になつてからもこの傾向はかわらなかつた。大御所となった秀忠も、大御台となつたお江（崇源院）も、また、それをそのままにしていた。寛永三年の上洛に際して、こうしたこと破綻が奇しくもあらわれたことを「徳川実紀」が記している。

寛永三年七月廿一日

掛川の城にやどり給ふ。こは、忠長卿家臣朝倉筑後守宣正があづかる所なり。よりて、けふも、忠長卿より、饗応し進らせらる。

凡、此度、御上洛によて、東海道中の諸大名城主領主、共に行路を修治し、駅館を經營し、巖石を埋、橋梁を新につくり、心をつくしけり。駿遠は忠長卿しろしめす所なれば、殊更結構をつくされける中にも、さしも早瀬の大井川に浮橋をわたし、平地のごとく往来たやすくかまへらる。供奉のともがら、上下ともに、忠長卿の巧智を感じざるものなし。然るに、車駕この橋にのぞませ給ひ、御けしき以外かはらせ給ひ、それ、箱根、大井の両險は、関東鎮護第一の要地なりと、神祖にも、今の大御所にも、常に仰せらるる所に、かく浮橋を渡し、諸人往来の自由を得せしむる事、言語同断の所為とて、御憤り大方ならざりしとぞ。

御けしきは
中政入りの

株式会社

ひかみや

中央通り ☎2-0109

(「国史大系」本『徳川実紀』2、三七四頁)

この記事は、忠長と家光の考えかたのちがいがい、したがって所行の相違を端的に示したものととして興味ふかい。

忠長は、生母を失ったのちも、なお、父秀忠が在世し、かわらぬ温情をそそがれていた。しかし、忠長のような自意識過剰の人間には、精神分裂などの病的な行動が起こってくることも少なくない。『徳川実紀』寛永八年四月の条(大猷院殿御実紀卷十七)に見える次の記事は、忠長にこうした病状がおこり、遂に精神異常にまでなったことを端的に示している。

株式会社 安井書店

90山崎町山崎郡栗
TEL山崎②0700(代)

「この年ごろ、駿河大納言忠長卿、身のふるまい凶暴にして、去年より、罪なき家士数十人を手討にせられ、そのさま、全く狂気に類せり(家譜、東武実録、江城年録)。

(これより先、忠長卿封地にて数万の勢子を駆催し、浅間山に入て猿狩せられ、一千二

百四十余頭をかり得。其帰路、乗物のうちにて小刀をぬき、興丁の臂をさしつらぬかれしが、この後は、何となく狂気のふるまひ多しとぞ聞えける。——藩翰譜——)

大御所秀忠は、この報を得て、どんなに驚き、また、悲しんだことであろう。秀忠がこのことに対してとった処置、ならびにその後の経過は、右の記事のあとに続いて掲げられている。

「大御所、このことを聞召、その家司朝倉筑後守宣正を召て、汝を忠長の後見として、数年、保傅の職に置事、かかる行跡を諫めんためなり。然るに、忠長が頃日の挙動。頗る人理にそむく。みな、汝が罪なり。とて、宣正を酒井阿波守忠行に召しあづけらる。忠長卿大に悔悲しんで、尾・水両卿、天樹院御方につきて、忠長が非道、全く宣正が罪にあらず。我身をいかにも罪せられ、宣正が御勘気をゆるし給ふべき旨、再三願はる。よて、忠長卿は、家司鳥居淡路守成信が所領甲州の内に蟄居し、病癒るまで養生せよ、と命ぜられ、宣正は御勘気ゆりて駿府に赴き、家国の政を沙汰すべし、と仰付られ、淡路守成信は江戸にありて、卿の北方を守護し、邸宅を守るべし。三枝伊豆守守昌、屋代越中守忠正、興津河内守直正、天野伝右衛門清宗、大久保将監忠尚、内藤仁兵衛政吉、日向半兵衛政成、村上三右衛門吉正は交代して甲府を守り、渡辺監物忠、松平壱岐守正

朝、松平志摩守重成、朝比奈弥太郎泰勝四人の大番頭は、駿甲両府にかはるがはる勤番すべし。と仰付らる。(東武実録、江城年録) //

忠長の生涯にとつて、この事件は致命的なものであった。たんなるわがままとか、傲慢不遜とかいったものを超え、「狂気に類」する行動があったということは、普通の人間社会から隔離されねばならぬからである。秀忠が、愛児忠長のこうしたふるまいを見て、傅役朝倉宣正の罪を問うたのも、その心中を察することができると、忠長の申出や、叔父の尾張義直、水戸頼房、また実姉の天樹院(千姫)の取りなして、これは、本人の処置によつて事件をおさめねばならないと、忠長の甲府蟄居、領国内施政体制の改革で片付けたのであった。それにしても、「病癒るまで養生せよ」と命じた秀忠は、真に、これがなせるものと思つたのであろうか。医学の発達してない当時では、こうした病氣に対する理解も充分ではなかつたらうから、真底、なおるものと思つたのかも知れないし、親の気持からすれば、必ずなおるものとして、一日も早くそれを期待したい気持でいっぱいであつたのであろう。

忠長は、寛永八年五月二十九日、駿府を発つて甲府へおもむいた。忠長の老臣、鳥居成次(成信の父)は、慶長五年(一六〇〇)、伏見城を守つて討死した鳥居元忠の三男で、元和二年

(一六一六) 忠長付となり、寛永元年(一六二四) 三萬五千石を領した人であるが、忠長に対しては常に訓戒を加え、人としての道を踏みはずさせぬようにつとめていた。寛永元年、駿河・遠江の国を加え与えられたときも、次のようなことがあつた。

// 一とせ、駿遠の地に本領甲州をそへてたまはらせ給ふとき、卿、以の外けしき損じ、御使に参りし青山大藏少輔幸成を散々に罵り給ひしかば、成次、大に驚き、幸成をばよきにこしらへかへし、さて卿に向ひ、君は天下の御子に生給ふといへども、

今すでに人臣たれば、関東の御家人は皆同僚とこそ申べけれ。まして、君父の御使をかく恥しめ給ふ事は、不忠不孝申べきやうなし、と、なくなくいさめ、直に御供して出仕し、拜賀行われき。 //

(大猷院殿御実

表装全般

…古いものを大切に…

表具師 松本永春堂

山崎町鹿沢本通り
TEL. 2-0122

紀卷十七、寛永八年六月の条)

また、寛永八年五月、忠長が就封の許可を与えられ、廿九日の出発を前にして鳥居成次に喜びを洩したときにも、次のようなことばをのこしている。(成次は、このとき、大病をわずらって臥床しており、二十日後の六月十八日、六十二歳で歿した)。

「このほど、卿には、就封の事を悦ばせ給ひ、成次が大病に臥たるに使用して此事告られしかば、成次、くるしげなる声をあげ、口おしき事をも承るものかな。大御所、既に御齡もかたぶきぬ。此日頃、御身もいたはらせ給ふ所すくなくならず。君は、將軍の御弟にて、天下の御かためなれば、片時も御側をはなれさせ給ふまじき御身の、かく遠ざけられ給ひて、ふたたび御側へかへらせ給ふ事あるべきや。成次、命あるほどはいかにもあれ、今、かく大病にて、大御所へもの申事もかなふべからず。となみだをながし、ほどなく易簣に至りしとぞ。」

(同書、同条)

長水城の盛衰 (上)

岩井忠彦

永禄三年(一五六〇)に桶狭間合戦で駿河の今川氏を倒した

織田信長は、ついで美濃の斎藤氏を滅ぼし、

永禄十一年には足利將軍義昭を奉じて上洛して、戦国大名中の第一人者としての地歩を固めた。その後、近江の

浅井氏、越前の朝倉兩氏を滅ぼした信長は、

天正元年(一五七三)將軍義昭を追い、同三年には甲斐の武田氏を

長篠合戦で圧倒した。

こうして、戦国時代も終盤の天正年間には、織田氏に對抗できる勢力はわずかに西国の雄・毛利氏のみという状況になっていた。

この両者の対立の最前線となったのが播磨である。戦国末期を彩る悲劇的な戦いの多くが播磨を舞台にして行われたのも、自然のなりゆきであった。

第一の悲劇は、播磨の西端の上月城をめぐる、二度にわたる合戦であった。

この城は美作街道を制する戦略的な位置にあり、天正五年に織田方が攻囲、占領して、尼子勝久、山中鹿介(鹿之介)主従

美術・工芸・画材

いとう画廊

贈答品に絵画・軸物・版画を!!

出水町通り・☎2-0371

この城は美作街道を制する戦略的な位置にあり、天正五年に織田方が攻囲、占領して、尼子勝久、山中鹿介(鹿之介)主従

がこれに拠っていた。しかし、翌年再び毛利方の攻撃を受け、折から始まった三木城攻防戦のため織田氏の援助を断られた上月城は、七十余日の籠城の後陥落した。勝久は自害、鹿介は斬られて、名門尼子氏復活の夢も潰えたのである。

前後二回の上月城攻防戦の間に、織田氏に服従していた三木城主の別所氏が毛利氏に通じて、織田方の先鋒・羽柴秀吉軍の攻囲を受け、世に「三木の干殺し」と呼ばれる凄惨な戦いの後、十八カ月後に陥落した。城主の別所長治は、城兵の助命を交換条件として自刃した。天正八年正月のことである。

また、この攻防戦の間に、神吉・志方・高砂等の支城もすべて潰滅した。南北朝以来の播磨の名門、赤松氏の末である、竜野城主の赤松広秀（広英）は、戦うことなく城を開き、揖西の佐江に隠退した。他の城も同様に陥落し、あるいは開城した。

こうして、播磨に土着の勢力はほとんど一掃された。最後に残ったのが、長水城とその

創業嘉永元年 きものと共に130余年
高級呉服の専門店



山崎町本町（さつき通）
☎(07906)2-1680代

支城に拠る、宇野氏及びその配下の土豪たちであった。

眼下に因幡街道を見下す標高五八五メートルの長水山頂に城が築かれたのはかなり古く、『赤松家播備作城記』によれば、「赤松信濃守範資の四男である広瀬遠江守師頼が長水城を築いた」とあり、赤松氏の諸系図とも一致する。ただし、『播州諸城交替連綿之記』は、朝水（長水）城主として柏原為永とその子の為利の名を挙げ、為利の後を師頼が継いだとしている。柏原氏もおそらくこの地方の土豪であろうが、確かなところはわからない。『赤松秘土録』等にも見える、佐用郡上津郷の柏原氏と、あるいは何等かの関係があるのかもしれない。

しかし、柏原氏が長水城の初代城主であるとしても、長水城が山城として整備されるのは、『宍粟郡守令交代記』のいう、赤松則祐（円心の三男）による揖保川筋諸城の築城の時期と考えてよい。則祐は、白旗山城により山陽道を、城山城により美作街道・山陽道を押さえ、さらに長水城によって因幡街道を制して、播磨支配を確立しようとしたのであろう。

広瀬氏の時代は、師頼・則親・満親の三代、百年近く続いたが、嘉吉元年（一四四一）に赤松満祐が足利将軍義教を殺害し、城山城で自害した。いわゆる嘉吉の乱により、城山城等とともに陥落した。前記の『播備作城記』などは、当時の城主を満親の子の親茂としており、これに従えば長水城主の広瀬氏は四代続いたことになる。

その後、播磨は山名氏の支配下に入り、長水城は再建されな

かったようである。山名氏にはそれだけの余裕がなかったし、また播磨の北方に対する備えが、元来が但馬の雄である山名氏にとつてさほど重要ではなかったからであろう。

嘉吉の乱で滅亡した赤松氏は、長祿元年（一四五七）の神器奪取事件（赤松氏の浪人が、南朝方が保有していた神器を奪取し、北朝方に献上した）の功により復活する。そして、片岡醇徳が『宍粟郡守令交代記』に「文明元年（一四六九）、政則長水城を再興」とあるように、赤松政則の下で長水城も再び整備される。再建後の城主は宇野氏、初代城主は四郎入道加順という。以後村頼・政頼（祐頼）と継承されたというが（『播備作城記』『守令交代記』）、史料により差があつて明確ではない。ここで、嘉吉の乱以前の城主、広瀬氏のその後についてみておこう。長水城落城とともに、広瀬氏は城を捨てて落ちのびた。兵農分離以前のことと容易に帰農できたし、「二君にまみえず」という封建倫理も確立していなかった（それ故に、赤松浪人の神器奪取と主家再興の動きが強烈なインパクトを人々に与えたのである）時代である。神岡の波多野氏、揖保上の島津氏など、嘉吉の乱後も山名氏の支配下で命脈を保った赤松氏の被官は少なくない。

さて、広瀬氏。『赤松秘士録』では神西郡鶴居村、『赤松系図』によれば備前国高津郡に移ったとあつて一致しないが、『播備作城記』には、神西郡永良庄の稻荷山城の城主として広瀬近江守雅親の名を記し、「左近将監満親の嫡孫なり、応仁年

中より再営、居城とす」

とある。落城後、広瀬親茂は他郷にのがれ、（永良稻荷山城、別名残要城を再建したとあるので、移住先は神西郡鶴居とする方がより可能性は高いが）、雌伏の後、子の雅親の代になつて再起したのであろう。応仁年間といえ、まだ赤松氏復興の直前ではあるが、当時の山名氏の播磨支配の実態からすれば、あり得ないことではない。

なお、稻荷山城は赤松範資の八男、永良三郎則綱が最初に築いたとあるので（『播備作城記』）、長水城を広瀬氏が領したのと同じころ築かれていたものであろう。

外科・内科

山中医院

院長 山中陽一

山崎町西町・TEL②0036

宍粟郡鉄で鍛えられた

山崎八幡神社の奉納刀について

前田 昇

山崎八幡神社の『神社明細書』に書き留められている宝物記録のなかに

「棒鞘(白鞘) 太刀 桐箱入 長サ一尺九寸 焼刃直焼(刃文が直刃) 一口 高柳加賀守藤原貞広 同子国継 以宍粟鉄作 正徳二壬辰(一七一二年)五月 山崎平瀬源右衛門信古 寄付」



とあり、その現物も同神社に、大切に保管されている。

註||太刀と記されているが、太刀は刃を下に向けて佩き、銘は太刀を腰にして外側に切られているもので、この場合は太刀ではない。刀剣分類上は刀(刃を上に向けて

腰に指し、銘は太刀と反対で、二尺以上)より短く、脇指(一尺以上二尺未満)に属する。刃文も「直刃」でなく、「互の目」のようである。



そして、表銘には

「正徳二壬辰年五月吉日 高柳加賀守藤原貞広 行年七十有

ニ 同子国継相共 以宍粟鉄作之」

と、受領銘(刀工名だけでなく、〇〇守と、かた書きを付す)

に添銘(刀工名・製作年、以外のことを切る)が切られており、裏銘には

「播磨宍粟郡鎮座 奉納山崎八幡宮 願主平瀬氏信古」

と、刻まれている。

この奉納刀を鍛えた刀工の藤原貞広は、延宝から元禄期を中(一六七〇から一七〇〇年ごろ)に作刀した越前の刀工で、下坂一派に属し、京・大坂でも鍛刀しており、そして、この刀は刀銘にもみられるように、彼の晩年七十二才の老練期に、子

の国継と共に鍛えた父子合作刀である。

刀を奉納した平瀬氏については、宇野正磯氏刊『近世鉄山史料』に「鉄山師千草屋」として、概略つぎのように説明されている。

「かつて赤松氏一族であった先祖が、秀吉の播州征伐以後、千草郷で帰農して平瀬姓を称し、そのうち平瀬清信（万治二年一六五九年没）のとき山崎に出て鉄山師を始め、源右衛門と名乗った。

のち代々、源右衛門を襲名して宍粟郡全域で鉄山を営し、家業繁栄して京・大坂にも出店をつくり、盛時には大坂に屋号を千草屋という鉄問屋を持っていた」と、

ちなみに、この刀の鍛えられた正徳ごろの大坂には、延宝刊「難波鶴」や元禄刊「日本国花万葉記」などから推して、三〇数軒の刀鍛冶があったと考えられ、さらに「銘切師」や「刀身彫物師」などの分業化もあって、美術品化・商品化された刀剣が、大量に生産されるようになっていた。

そして、それに使用される鉄は、播州・作州・備中・伯州・雲州その他、山陽・山陰の諸国から運び込まれていたのである。

「大阪商業史資料」によると、正徳ごろの大坂には一〇軒の鉄鋼問屋があったようである。千草屋もそのうちの軒として、宍粟郡内各地での鉄山稼業によって生産された宍粟鉄を売り捌いていたものと考えられる。

この刀の奉納された経緯は不明であるが、神社記録や刀銘か

ら推測すると、清信から数えて四代目に当る

千草屋の当主・平瀬源右衛門信古（享保一五年一七三〇年没）が、

大坂の千草屋を介して当時大坂にいた刀工・

藤原貞広に、宍粟鉄による奉納刀の鍛刀を依頼し、何ごとかを祈願

（宍粟鉄の使用を明記されていることから）

家業隆盛。老刀工と子の

の刀工の合作からは、家内安全・厄払い・長寿祈願などが考えられる）のため、山崎八幡神社に奉納したものであろう。

いずれにしても、添銘に「以 宍粟鉄 一作之」と明記され、

宍粟鋼の優れた鍛肌を見せてくれるものでもあり、郷土にとつては極めて貴重な史料である。

昭和五十八年十月



山崎町内の地名(三)

入江 静夫

会報六二号の続きを報告します。

五、神野地区

(36) 大字三津に小字一三です

1. ホキノクチ
2. 川バタ
3. 小牛芝
4. 中瀬
5. 茶ノ木田
6. 官弦寺
7. 西ノ溝
8. 上ノ山
9. 北山
10. コラサコ
11. 治郎大夫畑
12. 滝谷
13. 下山

(37) 大字梯に小字一五です

1. 馬瀬
2. 牛石
3. 西山
4. 後坂
5. 久保木
6. 中木戸
7. 長屋
8. 中林
9. 広芝
10. 釜屋
11. 北山
12. 東山
13. 毛刺
14. 焼ノ谷
15. 落蔵

(38) 大字五十波に小字一七です

1. 築瀬
2. 酒屋畑
3. 寺垣内
4. 才ノ元
5. 塚林
6. 尾崎
7. 上ノ田
8. 土居
9. 才ノ木
10. 小瀬
11. 小滝
12. 山陰
13. 五入道
14. 西ノ谷
15. 坂手
16. 大畑
17. 宮山

(39) 大字田井に小字一三です

1. 平尾
2. 西畑
3. 東田
4. 中畑
5. 寺田
6. 檜ノ下
7. 中屋敷
8. 道間
9. 森谷
10. 妙慶谷
11. 福城谷
12. 菖蒲谷
13. 宮ノ谷

(40) 大字与位に小字四〇です。

1. ホキ
2. ホキノ内
3. 南山
4. 中坪
5. ハザコ
6. 北谷
7. 清水山
8. 宮ノ南
9. イガイ林
10. ドロヘン
11. ヲカ
12. 奥谷
13. 垣内
14. 久保ノ下
15. 清水
16. 小瀬
17. グロハザ
18. 杉ノ前
19. 川原田
20. 宮ノ下
21. 岩元
22. 大林
23. スリ
24. 高尾
25. 高尾山
26. 高尾山根
27. 北山
28. 北山田
29. 山花
30. 丸山
31. 皆尻
32. 宮ノ西
33. 北垣内
34. 西ノ高下
35. 山花尾
36. 森ケ丸
37. 頃谷
38. シカキ谷
39. 西山
40. 頃谷山

(41) 大字清野に小字一二です

1. スリ
2. ハマコウケ
3. 中河原
4. 名小瀬
5. 三渡り
6. 三木
7. 古井ノ上
8. 長谷
9. 馬地
10. カタ山
11. ヤジロ畑
12. 梅ケ谷

(42) 大字杉ヶ瀬に小字二三です

1. 下河原
2. 前林
3. 奥林
4. 桜林
5. 松ノ元
6. 水ヌキ
7. 前河原
8. 川原
9. クジガ谷
10. 上ノ谷
11. 小畑
12. サルホシ
13. クチナシ
14. 乞食イケ
15. 与八良
16. 桃ノ木ザコ
17. ツツミ
18. ナル谷
19. 梅木畑
20. 向ヒ林
21. ヒョエ畑
22. ヤゴ谷
23. 穴ノモト

(43) 大字木ノ谷に小字七です

1. 山ノ元
2. 迎田
3. 北川原
4. 段
5. 谷口
6. 細ノ谷
7. 東山

(43) 大字母栖に小字三九です

1. 東谷
2. 尾瀬
3. 西尾瀬
4. 上垣内
5. 西垣内
6. 西裏
7. 林戸
8. 谷山
9. 小金イソ
10. ヤゴ谷
11. 広畑
12. カニワ

食品の店

い ま や

さつき通り4丁目
TEL②0169

六、葛沢地区

(45) 大字生谷に小字一です

- 1. 北山根
- 2. 西法師ヶ谷
- 3. 新池
- 4. 中池
- 5. 奥池
- 6. 奥山
- 7. 東法師ヶ谷
- 8. 東山根
- 9. 都多郷
- 10. 西垣内
- 11. 西川端
- 12. 柳ヶサコ
- 13. 水木ヶサコ
- 14. 堂ノタワ
- 15. 松尾谷
- 16. 上ノ山
- 17. 桜ノ
- 18. 奥野原
- 19. 窪ザコ
- 20. フレホリ谷
- 21. 灰ヶタワ
- 22. 中野原
- 23. 下野原
- 24. 番所谷
- 25. 横ガケ
- 26. 滝
- 27. ノ元
- 28. ガンネン
- 29. ヨチ小倉
- 30. 外ガタワ
- 31. トンゴネ
- 32. ニヶサコ
- 33. 一ノ谷
- 34. コジキイケ
- 35. ツツラサコ
- 36. 若宮
- 37. 神ノ先
- 38. 牛アソビ
- 39. 長サコ

(46) 大字下町に小字一八

- 1. 志水ノ元
- 2. 宮ノ脇
- 3. 権現
- 4. 田中
- 5. 戸敷
- 6. 上ノ山
- 7. 中実
- 8. 塩坪
- 9. 池ノ下
- 10. 三ノ谷
- 11. 与泰寺
- 12. 石橋
- 13. 突出
- 14. 中溝
- 15. 前田
- 16. 長泉寺
- 17. コニヶ谷
- 18. 白山

(47) 大字宇野に小字一六
です

- 1. 寺屋敷
- 2. 倉道
- 3. 山ノ才
- 4. 堂ノ尾
- 5. 野林
- 6. 池田
- 7. 東山
- 8. 為信
- 9. 町裏
- 10. 町屋敷
- 11. 天地
- 12. 谷口
- 13. 天子
- 14. 構
- 15. 殿町
- 16. 土手下

(48) 大字片山に小字六です

- 1. アケサ
- 2. 山根
- 3. 田中
- 4. 谷口
- 5. 轟
- 6. 日ノ谷

(49) 大字下牧谷に小字一〇です

- 1. 太夫垣内
- 2. 谷
- 3. 中ヶ坪
- 4. 下タ田
- 5. 上へ田
- 6. 宮ノ谷
- 7. 三本榎
- 8. 北野
- 9. 落久保
- 10. クボフ

(50) 大字上牧谷に小字一二です

- 1. アガタ
- 2. カネ元
- 3. 高砂
- 4. 有谷
- 5. 上田
- 6. 大砂
- 7. 高下
- 8. キタ
- 9. 岡
- 10. 横野
- 11. 菅町
- 12. 糸崎

(51) 大字大谷に小字七です

- 1. 天上木
- 2. 大砂
- 3. 家ノ元
- 4. 北畑
- 5. 向林
- 6. 広畑
- 7. 坂手

(52) 大字東下野に小字一二です

- 1. 西田
- 2. 南垣内
- 3. 宗広
- 4. 井口
- 5. 小林
- 6. 前田
- 7. 久保田
- 8. 上田
- 9. 森ノ元
- 10. 井上
- 11. ナサラベ
- 12. 川向

(53) 大字中野に小字二七です

- 1. 権現
- 2. 流田
- 3. 向田
- 4. 西林
- 5. 山根
- 6. 井口
- 7. イブ
- 8. 家ノ元
- 9. 山ノ上
- 10. 井ノ元
- 11. 川端
- 12. 下タ川
- 13. 足倉
- 14. 一ノ久保
- 15. 田ノ尻
- 16. 大川原
- 17. 宿
- 18. 西山
- 19. 矢柄
- 20. コイノ元
- 21. 田中
- 22. 三度左
- 23. 上ノ段
- 24. 中坪
- 25. 上川端
- 26. 宮ノ元
- 27. 長吾

(54) 大字上ノに小字三二です

- 1. 明延 2. 谷 3. 岡 4. 猿行 5. サコ垣内 6. 堀田 7. ツイ
- 8. 上ノ山 9. 五位垣内 10. カシヤ 11. 川原山口 12. 前河
- 原 13. 小坂 14. 白井谷 15. 矢ノ枕 16. 小部 17. 田ノ上 18. 木
- 地屋下 19. 住山 20. 老後下 21. 野々角 22. 岸ノ下 23. 平野 24.
- 矢野 25. 杉本 26. 西山 27. 定道 28. 細野 29. 北尾 30. 小和田
- 31. 家垣内 32. サタハタ 33. 岩上谷

(55) 大字小茅野に小字一三です

- 1. 大戸 2. 下山 3. 板木 4. 上月 5. 出合 6. 南畑 7. ニラ
- 畑 8. 林 9. タカセ 10. 中磯 11. 宮ノ下 12. 後山 13. 白口

七、土万地区

(56) 大字葛根に小字二一です

- 1. 峠 2. 矢野 3. 矢の山 4. 三田畑 5. 小矢ノ東平 6. ハケ
- 尻 7. 小矢ノ西平 8. 穴田垣内 9. 上ノ川 10. 土井 11. 上ノ
- 山 12. 仲垣内 13. 段亀山 14. 浜田 15. 向田 16. 向田下モ 17.
- 畑尻ノ上 18. 松元 19. 南山 20. 向川原 21. 峠南

(57) 大字土万に小字四九です

- 1. フタツギ 2. 荒神川 3. 両歩谷 4. クラバサ 5. 溝ノ西
- 6. 宮ノ向イ 7. 小保木 8. 川戸 9. 市場 10. 八重谷 11. 土ノ
- 段 12. 山根 13. 円光寺 14. コモダ 15. 西山 16. 大谷 17. トヤ
- スノ 18. 入角 19. 三十代 20. 正宗 21. 東田 22. カゴ坂 23. 上
- 高下 24. ト井ノ上ミ 25. ヨイデ 26. ゴンゲン 27. キノミ 28.
- イラタニ 29. コウノハシ 30. ジゴク谷 31. タキ谷 32. 井ノ上

- 33. コウゾイ 34. 上ミ岡 35. 下モ岡 36. 岡ノ前 37. 岡ノ下 38.

(58) 大字塩山に小字一七です

- 1. 赤坂 2. 牛屋 3. 大町 4. 木野見 5. 神子谷 6. 宮段 7.
- 寺前 8. デンシヨボ 9. 荒神ノ上 10. 小谷 11. 金谷 12. 堂ノ
- 下モ 13. 平 14. 中島 15. 東山 16. 小野 17. 加賀須

(59) 大字大沢に小字四二です

- 1. 中山 2. 万合 3. 宮ノ前 4. 山獄 5. 田幸 6. 平萱 7. 流
- 田 8. 谷 9. 上田 10. 須間ノ原 11. 小ダワ 12. 大ダワ 13. 平
- 畑 14. シルタレ 15. 沢田 16. 段 17. 丸山 18. 細谷 19. 宮ノ上
- 20. 土地サコ 21. 段菜畑 22. 成ル土地 23. 金敷 24. 同免 25. 小河
- 内 26. 松尾 27. 立ゴモ 28. 土地山 29. 湯ケ谷 30. 河ノ橋 31.
- 谷ノ奥 32. タカンボウ 33. 差ノ谷 34. 谷菜畑 35. エマン谷
- 36. 大高羅 37. 川内 38. 島ノ谷 39. ツヅラ 40. 野々谷 41. 塩内
- 42. 段エマン谷

八、菅野地区

(60) 大字木谷に小字二四です

- 1. 道ノ下 2. 古木谷 3. 垣内 4. 出口 5. 猪垣内 6. 植畑ケ
- 7. 山田 8. 広芝 9. 大平 10. 座王 11. 北垣内 12. 河原 13. 向
- イ 14. 北水ケ谷 15. 西水ケ谷 16. 坂ノ平 17. シンナシ 18. 五
- 本松 19. 新山 20. 長畑 21. ヌタノヲ 22. ナル林 23. 猿ケ谷

24. 大ヶ久保

(61) 大字市場に小字二四です

- 1. 廻り田
- 2. 森ノ下
- 3. 道ノ下
- 4. 堂ノ下
- 5. 井ノ口
- 6. 上高下
- 7. 和田
- 8. 毘舎田
- 9. 齊ノ本
- 10. 実安
- 11. 向イ
- 12. 外輪谷
- 13. 浜津
- 14. 牧谷
- 15. シタイ月
- 16. 百枝月
- 17. 高畑
- 18. 石畑
- 19. 谷川ノ奥
- 20. 堂ノ谷
- 21. 大平
- 22. 東中妻
- 23. シダレ屋敷
- 24. 桃木山

(62) 大字高下に小字二〇です

- 1. 米山下出口
- 2. 下河原
- 3. 池ノ谷
- 4. 保工
- 5. 間所
- 6. 稲田
- 7. 平
- 8. 皆森
- 9. 助森
- 10. 吉藤
- 11. 長ヶ坪
- 12. 大谷
- 13. 十明
- 14. 蔵王
- 15. 広岡
- 16. 菅本
- 17. 谷
- 18. 米山
- 19. 西山
- 20. 西中妻

(63) 大字青木に小字九五です

- 1. 北側
- 2. 角ヶ谷
- 3. 藤ヶ沢
- 4. 三田ノ上
- 5. ウト
- 6. 中筋
- 7. 大河原
- 8. 西側
- 9. 中ノ坪
- 10. 上ノ田
- 11. 宮ノ谷
- 12. 日ノ裏
- 13. 楨谷
- 14. 宮川
- 15. 寺台
- 16. 小林
- 17. 井塚
- 18. 中河原
- 19. 青木
- 20. 古屋敷
- 21. 向山
- 22. 友垣内
- 23. 廻リサコ
- 24. 戸谷
- 25. 入道畑
- 26. 備前谷
- 27. 名出
- 28. スクノミ
- 29. 寺尾
- 30. 石ノ戸
- 31. 黒角谷
- 32. 小谷
- 33. 百町谷
- 34. 小山崎
- 35. 青木ノ上
- 36. フタ成
- 37. 向イ谷
- 38. トウケ
- 39. 友谷
- 40. 切窓
- 41. 船谷
- 42. 立通
- 43. 才ノ谷
- 44. 上ノ段
- 45. 西山
- 46. 尾鼻
- 47. 神子谷
- 48. 小船谷
- 49. 南谷
- 50. 一ノ谷
- 51. ユリ
- 52. 畑田
- 53. 榎木谷
- 54. 栃谷
- 55. 梅木谷
- 56. 母子谷
- 57. イモ尾
- 58. カウカ谷
- 59. カ

(64) 大字塩田に小字二二です

- 1. 下河原
- 2. 前田
- 3. 成岡
- 4. 九鬼
- 5. 木戸
- 6. 西垣内
- 7. 寺垣内
- 8. 若杉
- 9. 高田
- 10. 政所
- 11. 谷
- 12. 立サコ
- 13. 高下
- 14. 西端
- 15. 段
- 16. 天北谷口
- 17. 中川原
- 18. 明字
- 19. 高畑
- 20. 焼尾
- 21. 丸山
- 22. 塔ノ尾
- 60. 福田
- 61. 桧木谷
- 62. 惣ノ内
- 63. 中ノサコ
- 64. 越谷
- 65. ジャ
- 66. 抽ヶ谷
- 67. 畑ヶ田
- 68. 横谷
- 69. 墓山
- 70. 池ノ西
- 71. 広ント
- 72. 門口
- 73. 竹ノ下タ
- 74. 織ハシ
- 75. 庵山
- 76. 本ダウ口
- 77. 本峠
- 78. 若狭
- 79. コダガ谷
- 80. 岡ノ段
- 81. 土井尾
- 82. イラ谷
- 83. 下モ段ゲ
- 84. 藤平谷
- 85. 池ノ内
- 86. 勝地
- 87. 庵谷
- 88. 朴木谷
- 89. 梅ヶタワ
- 90. 杉ヶ谷
- 91. 土井
- 92. 天神ヶ谷
- 93. 丁ノ坪
- 94. ハゲ山
- 95. 小谷

以上の地名は登記に使用している地名ですが、地籍調査完了した地域を主としております。

地名の所在は地図に表わしております。

秋の研修旅行記

志水美好

五十八年十一月二十一日、私達一一九名は、三台のバスを連ねて阪神方面の旅に出かけた。八時に山崎を出発して中国自動車道を走り、宝塚ICからおりて川西市を北上、十時頃めざす

多田神社に着いた。

赤い欄干の御神橋を渡ったものの、道路が狭い為バスが曲り切れず手間どってしまった、あとの二台は橋の上でバスを降りて神社へ詣でることになった。多田川の清流に臨んだ高台にあって、老木が鬱蒼と茂る神域は多田院の故地として国の史跡に指定されている。神官の案内で随神門をくぐり立派な拜殿・本殿を拝み、珍しい「唐椿」や「オガタマ」の説明を聞いた。現在の社殿、神廟は徳川家綱の再建したものであり、源氏の祖廟にふさわしい雄大壮厳さで国の重要文化財になっている。続いて宝物殿で、源家の宝刀鬼切丸をはじめ刀剣、甲冑、古文書等の数々を拝観した。さすが源氏歴代の武将に係る品々で逸品ぞろいだと感心させられた。

多田神社を後にして、池田市箕面市を経て一路勝尾寺へ向った。幸い好天気恵まれ、箕面の山々の見事な紅葉を眺めることが出来た。寺に着いて先ず新築の広大な応頂閣（宿坊）で昼食をそろって頂く。食事がすんだ者から逐次小グループに別れて境内の諸堂に参拝することにした。広々とした山麓の境内には多くの堂塔が建ち並んでいて、観光バスを列ねての参拝客で賑わっていた。

勝尾寺から往路を引返して箕面の滝に立寄る。滝はバス道から遙か下までくだらねばならないので、足に自信のない人は上から滝を眺めるだけで、バスに引返し先に箕面駐車場へ直行してもらった。半数位の方は箕面の滝の美しさを近くまで行って

楽しんでもらった。

あと深谷に沿った道を紅葉を眺め乍ら三キロ程徒歩でくだることになる。途中滝安寺に詣った頃は、別れ別れになって数人の連れだけになってしまった。滝安寺の本坊前の紅葉は特に美しかった。しかし紅葉のトンネルをくぐる美しさを予想していたが、バスから眺めた紅葉の美しさはなく、下から見上げる谷沿いの紅葉は案外と見ばえしなかった。

箕面駐車場付近の商店街で夫々土産物を沢山買い込み、有志のど自慢を聞かせてもらったり、雑談に花を咲かせながら、全員つつがなく秋の研修旅行を楽しんで頂き、大体予定の時間に山崎へ帰着しました。

事務局だより

- 一、会報を皆様方の広場とする為、会員の原稿を募集いたします。左記事務所宛にお送り下さい。
- 二、春季研修旅行のご案内を会報に挿入しております。参加ご希望の方は早目にお申込み下さい。
- 三、二十代、三十代の若い方々も随時ご入会をいただいております。ご親戚、知人の方で未加入の方にご入会をお勧め下さい。

